

【子どもの観察例:サイモン】（男児 1971年6月25日生;4歳1ヶ月より20ヶ月間の記録）

・1975/07/24・サイモンの母親が当番 on duty で一緒にいる。サイモンは概して、母親が他の子どもらの世話をしていることにはあまり頓着してない様子であった。やがてミルク・サークルの時間になる。子どもたちは輪になって椅子に腰掛け、飲み物とお菓子をもらう。いつもの習慣として、母親が当番になった子どもは‘重要人物’となって皆にお盆の上ののっているおやつを配る役目を与えられることになっている。それでサイモンが促され、やおらそれをしかけたとき、突然まごつき、立ち往生してしまう。そして母親の席に戻って、<お母さん、やって！>と頼む。他の子どもらが彼の代わりをやりたがる。しかし母親に宥められて、ついに彼が、自信なげながらも、母親に片手を添えてもらい、お盆を手に次々に子どもらにおよつちのチーズを一個ずつ配ってゆく。その渋々といった態度からして、彼がそのおやつを誰にもやりたくないと思っているのは明らか。そして自分の分が最後に残っているかどうかをかなり心配している様子。だが自分の分が最後にあったとわかり、自分の席に座り、そのチーズを手にして安堵の面持ちとなる。一人っ子の彼だから、日頃他の子どもなどまるで眼中にない。彼がこうした事態に戸惑い、緊張したのも至極分かる気がした。

・1975/09/18……母親がバイバイと手を振り立ち去ってから、サイモンはぐずぐずと様子がまたまたおかしい。スタッフに励まされ、どうにかお絵描きを一枚仕上げた。当番の母親がそれを乾かす為部屋の隅へと持ってゆく。おそらく彼女が彼に<それが乾いたら、きっと家に持って帰れるわね>と言ったのがきっかけだろうか、途端にサイモンの眼に涙が噴き上げて、<ママ！ぼく、ママが欲しい……パパ！>と泣き叫ぶ。そして<それ(自分の絵)をママに後で見せたいの。だからお願いだから、ちゃんと見てね>と傍らの彼女にしつこく頼み込んでいる。それでも泣き止むことができず、<ぼくね、誰かぼくを世話してくれる人が欲しいの I want somebody to look after me！ハリエッタ！>と悲しげに叫ぶ。母代わりの依存対象と思ったのか、プレイリーダーのハリエッタに助けを求める。スタッフが次々に彼を落ち着かせようと、遊びをあれこれ勧めるのだが、どうにも効果なしで、誰もが‘くたびれ儲け’となる。ハリエッタが溜息まじりに、<彼の母親は、彼が求めるすべてのことをしてあげる。でもそれがここではできないのよね。何しろここには20人もの子どもたちがいるんだもの>と、私に愚痴をこぼす。

サイモンは尚も楽しまず、泣き叫んでいる。<ぼくね、ぼくのこと世話してくれる誰かが欲しいの。ラシエルがいい。ぼく、ラシエルの側に座りたい！>と声を張り上げる。ラシエルはとても美しい女の子で、いつもおしゃれな綺麗な服を着ていて、まるでお人形さんのような雰囲気なのだ。それで彼が彼女にちょっと‘恋心’を抱いてたものと見受けられる。それで私が、ジグソーパズルをしていたラシエルの側に椅子を持って行ってやって彼をそこに座らせる。ところが彼女は彼に何ら関心を示さない。冷ややかでも意地悪でもなんでもない、感情移入反応に不慣れなのだ。彼女がまるつきり目もくれないものだから、彼は彼女の視野の外に置き去りになったまま。彼の‘ラブ・コール’は功を奏しない。それで彼は心傷ついたので、ひたすらウェーンウェーンと尚もぐずり泣き叫ぶ。周囲のどの子どもらもまったく彼を無視している。「触らぬ神に祟りなし」というか、自分の中の‘赤ちゃん’を刺戟されたくないというのもあったろう。

そして彼らの無関心は‘赤ちゃん’みたいなサイモンへの侮蔑を密かに含んでもいだろう。子どもらの完璧な無視の態度はあっぱれ見事ともいえた。

彼の泣き叫びがあまりに耳障りになってきたので、私が彼を廊下へと連れ出す。玄関口に近い辺りで窓の外を眺めながら、あれこれと頻りに涙声で何やらしゃべりだす。母親の不在のこと、それに仲良しの女の子のジェマも今日はいないこと。〈ぼく、ジェマがいてくれたらいいのに…〉と嘆く。そして、ジェマは今も休暇中でどこかに出掛けているのかしら、それとも買い物に行ってるのかしら、それとも家で遊んでいるのかしら、もしかしたらぼくの家を訪ねてくるかもしれない等々、話しながらも自分の‘自由連想’に混乱をいっそう深め、涙が噴き出す始末。私がここで、〈お母さんが戻ってこなくて、そしてお家に連れて帰ってくれないかも知れないって考えて、とっても心配なのね〉と告げる。そうすると彼がごく自発的に夏休みの間に起こった或る‘事件’について語り始めた。涙ながらにグズグズと勢い込んでおしゃべりする彼の話というのは、要約すると、浜辺で遊んでいた折りに、偶然死んだカモメを岩の陰に見つけたというもの。〔母親の死を連想したのかな？〕しばらくしてちょっと様子が落ち着いた風になったので、彼を再び室内へと連れ戻す。

そのしばらく後、彼は滑り台にのぼっていて、〈ぼく、お母さんは買い物してると思うよ…〉と独り言を呟く。彼は滑り台の上に陣取っていて、マヤサが自分もと滑り台に足を乗せかけると、〈あっちへ行け！〉と怒鳴る。愛の対象たる母親の不在から死を連想し、その懸念をどうにか払拭し、そこで俄然勃発した「不在の対象」への攻撃欲を手近にいた他の子どもを肩代わりにして発散したというわけだろうか。お蔭でとばかりを食ったマヤサという女の子が気の毒であったが…。

ミルク・サークルの時間の最中にサイモンの母親が現れる。サイモンは母親を眼の隅でチラッと認めるが、全然何ら表立った騒ぎを示すこともなく、おやつをいただいた後に皆で一緒にやっていたお遊戯に熱中してる。母親が彼の椅子の裏側に立つ気配を察し、ちょっと母親の方に振り向いて、〈ママ、椅子に座りなさい〉と一言言って、またお遊戯に戻る。母親は、〈否、ダーリン、いいのよ。ママは大丈夫だから…〉と優しく彼に答えている。ちょっと前まで泣きの涙で大騒ぎを演じてたところの‘恰好悪い’自分など毛程も見せない。〔おそらく母親が不在中、彼の密かな攻撃性がために「内的な母親」は疲労困憊し、脆弱化したというわけだろう。それは大いにあり得る！それが「外的な母親」に投影され、俄然彼がその守り手として、母親を気遣ったということなのだろう。彼の一目‘紳士的な’気配りがなかなか心憎い。ここに‘いい恰好しい’彼の性格の一面が覗かれた。〕

・1975/10/10…サイモンと仲良しのジェマは愉しげに遊びに興じている。彼らだけの世界である。ウエンディ・ハウスにあったありつたけの毛布とシーツをスライド・ハウス slide-house(滑り台付きの木製の四角い大きな箱のお家)へと運び込んで、自分たちの‘隠れ家’を造るのにおおわらわだ。あちこちから取り込んだ物を並べて、彼らは一緒に食事をするという‘ごっこ遊び’をやり始める。それから上と下に分かれて、それぞれ別々の寝室で眠るんだとか…。ちょっとしたハネームーン気分かな？

・1975/10/24・・・サイモンとジェマはウエンディ・ハウスの中に2人だけにいる。ありったけの赤ちゃん人形がベッドにきちんと並べて寝かされている。二人のどちらも忙しげで、家事におおわらわである。

サイモンは紙に何事かを描いた。私がそれは何かと訊ねると、〈めんどりだよ〉と答える。確かにそうも見えるけど、でもその背中に小さな‘尻尾’が付いていた。〔なんだろう？雌雄(男女)の性別が気になるのだろうか？〕

サイモンは言う、〈ぼく、大きくなったらママと結婚するの〉。私が〈それじゃ、パパはどうなるの？〉と尋ねると、〈おじいさん grandfather になるの・・・〉と澄ました顔で答える。〔まるでなんの心的葛藤もない。エディプス・コンプレックスとは程遠い。唯我独尊である。まだ今のところは・・・。だが、何かが違う気配がなくもない。問題は父親をどう片付けるかであろう(!)。〕

・1976/01/23・・・いつもサイモンの仲良しの遊び友達のジェマが欠席だったため、この日彼は他の男の子らの遊びに加わるが多かった。あちこちを駆け回るなど、大いに活動的。そして、‘爆撃’ごっこの空想に耽溺した。たくさんの爆撃音をかなで、爆弾を‘船’あるいは‘列車’めがけて落とすという演出を企てる(‘船’も‘列車’も、実は床の上に積まれてあった‘積み木’なのであったが・・・)。興奮に駆られて、彼はいつもよりもはるかに活発で男の子っぽく精力的に見えた。

・1976/05/21・・・頻りにあだこうだと訴え続け、絶えずスタッフの誰彼を疲労困憊させる。例えば、〈ぼく、疲れた。眠りたい、でも眠れないの・・・〉などなど。私が彼を本のコーナーに連れてゆき、クッションでからだを支えるようにして居心地良くさせてから、物語りを聞かせると、落ち着いてくる。サイモンは実に大した‘ぐずりの虫’である。

・1976/10/06・・・ちょっとしたハプニング！たまたま私が近くの百貨店【Jones Barnes】の地下食料品売り場で買い物している最中、サイモンと母親に出会う。母親と私は挨拶を交わす。サイモンは、私の顔を居心地悪げに不審そうな面持ちで見上げている。私が彼にハローと言うと、彼は返答せず、母親にすり寄る。そして〈あの人、誰？〉と訊いている。母親は困惑した面持ちで私に笑って見せて、〈チズコじゃあないの〉と彼に呆れた風に言ってる。私の顔に見覚えがないとは驚きだ。この2日前に私はプレイグループで彼と一緒に遊んであげたわけだから。対象恒常性(object constancy)が不確か。内的に摂り込まれた対象がそもそも脆弱なのだ。いかにも彼らしいと妙に合点した。

・1976/10/08・・・ジェマが夏休み前にプレイグループを去り、その後釜の仲良しさんを見つけるのに手間取っていたようだが、サイモンは近頃頼りにイアンという1歳半下の幼い男の子と‘べったりな’関係になっている。2人はやや排他的ともいえた。2人だけでクスクス笑いながら、ひそひそソコソコ何事かをやっているといった印象だ。年の差はあるものの、2人は似たような性格を共有しているものか、どうやらとても気が合うようだ。彼らは、ドレッシング・コーナーであれこれ衣装をかき回し、2人一緒に‘すてきな

レディ’の装いをする。長いスカートにレディの帽子、それからストローを使って可愛い‘日傘’をも手にしたつもりになって、いざお出掛けということらしい。‘すてきなレディ’になった気分で、ちょっと気取ったふうな仕草をしながら、2人は意気揚々と外へと向った。

サイモンは、ウエンデイ・ハウスの中で‘料理’に没頭している。そこには幼い女の子のエスタがいて、おとなしくテーブルに座って、料理がふるまわれるのを辛抱強く待っている。サイモンは、ソーセージと卵をフライパンで焼いているんだよと言う。そしてすべて料理が済んで準備が整うと、エスタをまったく無視して、なんと自分の皿にだけ、それらをサーブした。さらにはティー・ポットの注ぎ口を自分の口に押し込み、ありったけのお茶をがぶ飲みし、ポットのお茶をぜんぶ飲み干したという仕草をした。それから直に、いかにも嬉しくてたまらないといったふうの高笑いをしたのである。[幼いエスタへの面当てで愉快愉快というよりも、自分の食欲さに内心恐れをなし、それを自ら笑いで打ち消したといった感じであろうか？]

この日、サイモンの母親は当番であった。おやつ時間の最中に、訪問者が現れ、プレイグループへの入会登録について問い合わせをした。そこで彼女は彼らと話をするために、その場から立ち去った。するとすぐさまサイモンは泣き出して、彼女の後を追う。[こうした予期せぬ事態にちょっと混乱したらしい。母親が見知らぬ誰かに‘拉致された’とでも思ったかな？]

この日の遊戯時間が終わり、どの子どもも玄関口の外に出て、親たちのお迎えを待っていた。幾人かはすでに現れ、互いにお喋りをしている。サイモンとイアンは互いにくっつき合っている。いかにも嬉しげだ。イアンが、<サイモン、ぼくのうちに来てちょうだいね>と言う。するとそれへの返答に、<イアン、ぼくのうちにも来てちょうだいね>とサイモンが言う。そして2人でいかにも愉しげにケラケラと笑い合った。

・1976/10/12・・・サイモンはとてもびっくりするような人物像を描いた。からだの上半身は2つの大きなおっぱいであり、それぞれ真ん中に乳首とも思われる大きな丸が付いている。それらの間に黒く塗りつぶされた箇所があり、それは彼のいうところの‘おへそ tummy button’ということだが。さて、おへそ或いは肛門？どっちだろう？ どうやらからだの下半身は完全に否認(denial)されているもようだ。



私が彼に、<これって誰かしら？>と訊くと、彼は<ヒト person だよ、ママかも・・・、あるいは誰かさん some people だよ>ということである。彼のいう tummy button が左右2つのおっぱいの真ん中にあるというのが奇妙だ。それも臍というよりか肛門っぽい印象だ。さらには、それに長く大きく伸びた手の指が5本、指先にはそれぞれ大きな丸が付いていて、強調されてある。ヤモリの手にある吸盤が想起された！どうやら、サイモンの‘ひつつき虫’的な傾向がママに投影されているようだ。下半身も足も無い。不要というわけか。むしろ有っては困るといった具合だ。眼は大きくて、耳もダンボのようにでっかいのが

愉快だ。ママの身に起こる何事も断じて聞き逃さないといった感じである。よく言えば好奇心が強いとか、或いは‘侵入的 intrusive’というべきか…。この意味からしても、この像はママでもあり、彼でもありそうだ。「外的なママ」がこんなふうには彼の心の眼には見えている。詰まりのところ、見えているものがすべからく己れの心を映すところの心象風景なんだ！

さらにサイモンは、この絵に‘虹’を付け加えた。＜ママが虹が欲しいって言うから＞と言い訳しながら…。それから私に向かって、＜空が欲しい？＞と尋ね、さらに虹の上に青い空を描く。なにかしら不穏な雲行きを察してなのか、すぐさま虹やら青空にしたのが傑作である。そんなふうには‘穢された(?)ママ’を再び‘きれいきれいのママ’へとすぐさまリセットできちゃうところがいかにも彼らしい。つまりクライム流に言えば、ちよっぴり‘償い(reparation)’にもなるだろうが…。この‘お気軽さ’が実に彼の性格の一端を表していると窺われた。私が彼に、この絵をもらえないかしらと訊ねると、彼はこれはママにあげるからと一応断ったものの、それからもう一枚同じようなものを書いて、私にくれた。

・1976/10/22…サイモンとイアンは「澄ましたレディ(貴婦人)」を装うことに懸命だ。どうやら結婚式に行くということが念頭にあるらしい。＜急いで！ バスに乗らなきゃ…遅れちゃうよ＞とか、互いにまったくその気になっている。

その暫く後、イアンはスライド・ハウスの梯子を登り、その天辺に腰掛けた。そして下にいたサイモンに向かって＜受けて！＞とボールを投げるふりをする。すると、サイモンもまたボールを受け止めたふりをする。それが愉快だと思ったらしく、大きな声を張り上げて笑い、何度も何度もこのキャッチボールを繰り返す。それから、サイモンはその想像上のボールを車のタイヤの中に放り投げることを思いつく。そのタイヤは少し離れた床の上にあったのだが、それはもっと愉快だということになり、この新しいゲームに熱中し、何度も何度も繰り返す。〔この遊びでは彼の「母胎」への‘侵入’が行為化されている。〕

サイモンとイアンは一緒にテーブルに着いて画用紙にクレヨンでなにやら描いている。アルファベットのなぐり書きのようでもある。そしてすぐにこのアルファベットの文字をあれこれ気の向くままに、線やらパターンへと変形してゆくようだ。同時に、アルファベットらしき音を口から発しながら。ちよっと興奮ぎみ…。〔もはや幼児のお絵かきではなく、おそらく大人の真似っこして‘手紙を書いている’自分が愉快なんだろう。この背伸びは無邪気でいい。〕

・1976/11/05…遊戯室はもともと教会のホールで、舞台が設置されてある。そこは幕で仕切りされていて、滅多に子どもはそこへは立ち入らないのだが、サイモンとイアンはどうやら楽屋裏へ踏み込んで探検したようで、やがて自分たちだけの‘秘密の場所’を見つけたいらしい。＜ここがぼくらのオフィスだよ＞と言う。実際にはオフィスとはどういうところで何をするのかはさっぱり分かってはいない様子だが、どうやらパパに関連しているのは確からしい。私が、＜オフィスなんだから、お仕事に使う鉛筆やら紙やらも用意しないとね＞と示唆すると、彼らは一応意味が分かったのかすごく喜んで、ブリーフケースを手に

持って、2人で勇んで必要な物品の調達に向う。ところが、パパの真似は真似としても、どうも今一つ「オフィス」の状況が把握しかねたようで、やがていつしかこの遊びも尻つぼみとなってしまふ。

[明らかにサイモンはパパに憧れている。ようやく彼の視野の中にパパが入ってきたということか。いい意味で貪欲なサイモンらしく、パパなんか要らないというよりも、自分もパパが欲しいやら、パパみたいになりたいといった具合になるとしたら、結構悪くない進展か。今はまだあれこれ表層的に女性性及び男性の‘バクリ’をしているだけだが。それもどンドン複雑かつ厄介極まりない事態となりそうだ。]

・1976/11/26・・サイモンとイアンは2人一緒にウエンディ・ハウスの中にいた。跳ね回って、なにやら意味不明の叫び声をけたたましくあげている。かなり興奮ぎみ。サイモンは人形を湯浴みさせる風呂桶の中へと身を投げて、やがてそこにお尻をつけ、入浴しているふりをする。一方イアンは人形のベッドの中に飛び込み、そこで寝たふりを始める。2人とも嬉しくたまらないといったふうにケタケタ笑っている。赤ちゃんへの退行も、そこには抑圧感も警戒心も何らない。ただ無邪気なのが可笑しい。

この後、2人はちょっと高めに設置されていた長めの板に両端から攀じ登った。それは‘船’なんだそうだ。そして二人はそこに並んで横になった。船室で寝ているふりをしているのだ。そのままじっと動かない。両者とも、まるで空想の真っ只中に没入しているかのようで、周りの子どもたちの騒音には一切我関せずといった具合だ。

[サイモンは、自慰行為に気を奪われていることが時折認められる。ブック・コーナーで彼は腹ばいになって絵本を読んでいた。クッションがたくさん置いてあり、彼はそれらを使っていた。そこで静かにじっと身体を揺らしている。明らかに自慰行為と見受けられた。また他の場合にも、遊戯中にだが、彼がじっと動かずに目を閉じていることがある。白昼夢のようだ。顔にはじんわりと微笑が浮かぶ。たぶんこの時点で、彼の中にある何らかの快樂の余韻を心のうちで反芻しているらしかった。]

・1976/12/10・・サイモンとイアンは2人だけでウエンディ・ハウスにいた。そこでちょっとした興奮が始まる。‘パーティ’を催すというのだ。そこにパトリック、エスタ、そしてアニヤが参入した。それから彼らはウエンディ・ハウスの中のものすべてを外へと放り出した。パーティのためにより大きな空間が必要なんだそうだ。やがて空っぽになったウエンディ・ハウスの中で皆が嬉々として飛び回る。大きな笑い声が混じる。そこに誰かが何枚か小さな絨毯を運び込んだ。おそらく空っぽのウエンディ・ハウスをパーティ用に飾りつけしようとしたのだろう。だが、この狂騒のさ中で、なぜかそれ以上の進展もみられず、直にパーティの件は忘れられてしまった。[大人のふりはしてみたい、だけど今一つ大人のすることはよく分からないということらしい。どちらかという、唯ウエンディ・ハウスを空っぽにしたかっただけなのかも知れない。もしもウエンディ・ハウスが「母親の胎内」を象徴するとすれば、勿論空っぽにしたかっただ理由は明々白々であろう。この頃、ハリエッタの後任となったプレイリーダーのジャッキーの妊娠の事実が、子どもら、特に目敏いサイモンに嗅ぎ当てられたものと推察される！]

・1977/01/13……サイモンは、ウエンディ・ハウスの中に居る。ベッドに寝かせた幾つかの人形に毛布をいかにも母親らしい仕草で掛けてやる。ところがその人形の一つ、それは何も身に付けていない裸の女の子の人形であったのだが、それを取り出し、〈ヒトを焼いちゃう(burn person)……〉とか呟いたかと思うと、オープンの中にそれを突っ込む。おかしくてたまらないといった風にたくさんの含み笑いやらゲタゲタ笑いをしながら、オープンに点火のスイッチを入れる。それから直にそれを取り出し、〈ああ、熱い！料理ができたあ！〉と言って、それをテーブルの上に置く。それからその脚に掴みかかり、いかにもそれをちぎり取った風な真似をして、それに一息にかぶりつく。そして私にもそうするようにと促す。それから私に〈……ここ、切ってよ〉と、人形の臀部を指し示す。でも彼自身勢い込んで自分の手のへりで(それは鋭い料理ナイフということらしい)そこに切れ目を入れる。更に彼は人形のからだの幾切れかの肉を切り取って、お皿に盛り付け、それを私に食べさせようとする。たまたまそこに居た幼いジョシュアもサイモンをそっくり真似て、私にその皿の上の肉の切れ端を食べさせようと頻りに促す。2人の目には悪戯っぽい輝きがあり、ゲラゲラ笑いが続く。しかしそれも或ることで中断される。‘怪物’のガリーが窓からウエンディ・ハウスに侵入し、それをサイモンが追い払うのに懸命になってウエンディ・ハウスを出てゆく。……そしてしばらくすると、すぐ隣りにたまたまあったはしごを利用して、壁伝いにウエンディ・ハウスに彼は戻ってきた。ベッドに寝かせてあったもう一つの裸の女の子の人形を手にして、それをオープンの中へ突っ込む。しばらくそのままにして、それから取り出すやそれを窓の外へと放り投げる。そしてその後を追う。拾いあげるや、そこにあった大きなダンボール箱の中へと故意に落とす。後で聞くとそこに抛ればそれはゴミ箱で、人形を不要なゴミ類と一緒に燃やしてしまいたかったのだと彼は語る。〔執拗な「母胎」の‘inner-child(内なる子ども)’へのテロ行為である。ゲラゲラ笑いの裏には隠された恐怖が窺われる！〕

それから、〈ぼくね、休暇でお出掛けなのだよ〉と言う。汽車に乗っておばあさんのところへ行くのだと言いながら、私にバイバイと手を振って、去る。そしてジャングルジムの天辺に座ったまましばらくじっとしている。それから再びウエンディ・ハウスに戻ってきて、テーブルの上に置かれたままの裸の人形を眼にするや、それにかぶり付き始める、そして私にも同じようにするようやや強硬に教唆する。それから両手でそれを押さえ付け、人形の歯をそして眼をも抜き取ろうとする仕草をする。〈血だらけ bloody、血がいっぱいだね〉と高笑いする。この時点でジョシュアがやかんを手を持っているのを認め、自分もともう一つやかんを手に入れる。2人でそれから水を飲むふりをしていたが、興奮し始めて、‘水’を私の頭の上に掛けようとする。それ以上彼らの残虐性の犠牲になってはならぬと考えて、私はその場から逃げる。そして尚も追掛けてくる彼らに、もうおしまいにしなさいと命じる。それで彼らは一旦歩み去ったが、サイモンは懲りずに直に武装して(積木を‘銃’に見立てて)舞い戻ってきて、私目掛けて撃とうと構える。〔愛の対象もいずれは老朽化し、もしくは荒廃と化し、‘用済み’にされちゃうのかな？〕

〔クライム流にいえば、自慰空想(masturbatory phantasy)が真っ盛り。‘悪いペニス(bad-penis)’が猛威を振っている。無論のこと、力(potency)を巡っての良いペニス(good-penis)なる父親との競合が潜在的に窺われる。即ち生殖か殺戮かの戦いとなる。両親間の‘性交’がすなわち弟妹の誕生

となるとすれば、なんとしてでも食い止めたかろう。ここに、俄然彼の被害意識が頭を擡げる。それはあまりにもリアルであり、当然防御は熾烈かつ執拗を究め、彼が子殺しの‘殺人鬼’になるのは必至。放逐の恐れ、そして耐え難い矮小感がいつしか宥められるまで、こうした「自慰空想」は止まらない。それも、かつての‘ママ大好きな甘ったれ’サイモンの成長の証しではあるが・・・。]

・1977/01/26・・・誰かが両天秤棒を持ってきたらしい。だが、どの子も、重量という観念をまだ把握し得ないようだ。サイモンはその例外。他の子どもがそれを使うのを眺めながら、<それでバランス取れてる・・・こっち、ちょっと重過ぎる・・・>などと言ってる。認識力も知的好奇心も悪くなさそうだ。

・1977/02/04・・・サイモンはウエンディ・ハウスの台所用品をすべて手にして、スライド・ハウスの内側へと運ぶ。彼は<休暇を過ごしに出かけるんだ・・・>と言っている。それで列車に乗ったんだとか。その乗り込んだ‘列車’がすなわちスライド・ハウスというわけ。彼はその天辺に腰を据えて、手を振る仕草をしている。彼は「さようなら」の場面を演出しているらしい。・・・サイモンは大きな積み木を幾つも床いっぱいに並べて、一つずつ積み木から積み木へと跳ぶ。私が何してるのと訊くと、彼は<ここは海なの。それで積み木の上を歩くの。それで海に落ちないようにね>と返答する。[これらの遊戯は、彼が直にこのプレイグループを卒業することが予定されているのと関係しているようだ。「さようなら」はいつも彼には苦手。愛着を断つことの抑うつ感に落ち込まないためには、どうやら一荒れきりな雲行きだ！]

・1977/03/04・・・私が1週間のお休みのあと、プレイグループを訪ねると、サイモンが目ざとく私を見つけて、裸の女の子の人形をぶらさげて近寄ってくる。それを私に示し、<あのね、この子、お尻がどうかしてるの。調べなきゃあね。看護婦さんが検査するって・・・>と言う。ほくそ笑みを浮かべ、何やら陰謀めいた気配あり。それを傍らにあった車のハンドルの真上に乗せて、しきりにケタケタ笑いながら呟く。<ここ切るんだよ。ウンチ、ウンチだあ>と、人形の臀部を指差しながら言う。それから、その車のハンドルをグルグル回転させ始める。‘レントゲン撮影’をしてるつもりなんだとか。なかなか賢いと感心しながら見ていると、まもなくサイモンは毛布を持ってきて、おそらくそれで裸の人形を包むつもりでいたのだろうが、突然悪戯を思いつく。人形ならぬ私に、それを巻き始めた。すると間髪を入れず、周囲にいた何人かの子どもらが、男の子だけでなく女の子もサイモンに加わって、総出で私に襲いかかり、毛布を私のからだに被そうと群がった。あたかも彼ら一人ひとりの攻撃性に火がついたかのようで熾烈さを極め、私はほうほうの体で彼らから逃れる。サイモンの自慰空想的な遊びに他の子らが同調したわけだ！

[子どもらが総勢私に向かってギャング化するのは、不思議と私が観察をお休みにした後必ずといっていいほどに起こる。私は大して責任のある立場でもないし、特にアタッチメントの対象ではない。それでいながらも、いつも居るはずの私が‘不在’だという事実は、どこか彼らの内に不安をかもし出すのだろうか。「母親の不在」はすなわち‘妊娠’となる。つまり‘赤子 inner-child の誕生’というわけだ。まさにこれは‘転移’状況だ。それはセラピイの場面ではごくおなじみだが・・・。彼らにしてみれば、私が彼らを‘裏切った(!)’のだから、そのせいで彼らの鬱憤から私(=母親でもあり赤子でもある)が襲撃された

としても‘自業自得’だということになろう。この点、情け容赦がない。ここでサイモンの否認するところの母親の‘下半身 bottom’はもはや否認しようがない。そして‘下半身’は集中砲火を浴びる。彼の自身の‘ウンチ的感情’が溜め込まれている危険極まりない下半身が投影されている。転移状況において、その鬱憤晴らしのための‘餌食’は誰でもいいのだろうが、たまたま私とそのターゲットとなったということだろう。サイモンもこの月末にプレイグループを去るが、実は私も内心ではそろそろここでの観察を終わりにしようと思っていたわけで…。どちらかが‘喪の儀式’を通過しなくてはならないのだろう。]

ウエンディ・ハウスでエスタがお茶の用意をしていた。おやかんに火を付けたり、お茶のカップとお皿をテーブルの上に並べたり、その後でお湯をカップに注ぐまねをしてみたり…。たまたまサイモンとギャリーが周辺にいた。するとサイモンが、<ぼくが‘パパ’になるね、エスタが‘ママ’だよ>と言う。ギャリーがサイモンに尋ねる、<ぼくは何になるの？>と。サイモンは、<ファーザー(父親)になればいい>と告げる。ギャリーは全然納得いかない。<パパはファーザーだよ、同じじゃないか！>と問題提起する。サイモンは全然気にも留めないふうでギャリーを無視する。[サイモン本人にしても解決の糸口が見つからないのだろう！]3人の中には大して交流はないまま、それぞれがそれぞれの気の済むままにウエンディ・ハウスで忙しくあれこれしばらくはやっていたが、やがてギャリーは脱落。残されたサイモンとエスタはそのまま‘パパ&ママ’ごっこを続けてゆく。主に<一緒にお茶しましょう>といったことだが…。ところが、それからサイモンは、彼の身近で背を向けて立っていたエスタを後ろから両腕で抱えて持ち上げようとする。バランスを崩し、その弾みで両者とも床に横倒しになる。サイモンはなんら言葉を発することはなく、黙りこくったまま、ただじっとエスタをきつく抱きしめている。エスタは明らかに居心地悪げである。そして、戸惑っており、ちょっと怯えてもいる様子にも窺われた。しかし何ら言葉を発することもしない。その恰好のまま、サイモンは尚もエスタを相手にレスリングのような行為に臨む。そこで私が彼らの間に割り込んで、エスタをその圧倒された感情から解放せんとした。私が何か他のことをして遊ぼうと提案してみる。彼らはどちらもすなおに従った。

[この時点で、妊娠しているプレイリーダーのジャッキーのお腹がかなり大きくなって目立ってきた。このことが子どもらに、特にこの場合はサイモンに、不穏な感情を抱かせているのはどうやら疑いようがない。‘パパ&ママ’になるということは彼らにとって謎謎なのだ。特に‘下半身 bottom’は謎というわけだ。]

・1977/03/08…ダン、ジェームズ、それにニールが以前建てた積み木小屋があった。今はもうそこは使われていない。それにサイモンがたまたま興味を抱いた。その小屋の中へは丸い穴からしか入れないので、そこから潜り込もうと試みる。が、ふと思いとどまる。代わりにその丸い穴を積み木で封じてしまう。そしてすぐに彼自身の‘家づくり’に着手する。積み木をいっぱい集め始める。その途中で彼は‘電話’を見つける。それを自分の積み木の家置くことを決める。こうした作業の最中、傍らにいた私に彼はお喋りする。<家にね、電話が3つもあるんだよ。ママが2つ持ってて、そしてファーザー(父親)が1つ、ぼくなんで1つもないの。だけど、ぼくが大きくなったら、ぼくも電話持つよ。ぼくがパパになるときはね、ママは33だよ。ファーザーは56になるんだ。ぼくがパパになったら、彼はおじいちゃん(grandfather)に

なるわけだよね。> 彼は、この結論にひどく満足げであった。そこで上機嫌で積み木の家作りに取り掛かる。彼はなかなか建物の構想が緻密であった。彼がいうところの‘キャラバン(caravan/移動住宅)’には、後方の片側に玄関口があり、前方の両側に2つの予備の積み木が置かれた。それは車のライトなんだそう。中の運転席にはハンドルも設置され、その他に仕切りのある寝室をも用意されたから、キャラバンは全体としてうまく仕上がっている。それから彼は、エスタにこのキャラバンを見てもらい、ぜひ一緒に遊ぼうと思いつく。それで彼女を誘いに出かけてゆく。

ニールがクレヨンでお絵描きしていた。魚が水の中にとやら、パパのヴァン(配達車)が荷物を運んでいる途中だとやら。さらに、一枚の紙を円く切り抜き、その真ん中にハサミで切り込み slit を入れる。私がそれ何？と訊くと、<ボールがはじけたんだよ burst ball··>と説明する。サイモンが、たまたま傍らにいたニールと私の会話を盗み聞きしたようだ。ニールとは直接なんら交流なしに、即座に彼のアイデアを借り、同じことを試みた。つまり一枚の紙を円く切り抜き、さらにその円の真ん中にハサミで切り込み slit を入れる。そして同じく<ボールがはじけちゃった burst ball··>と言う。それからなにやらモジョモジョと独り言を頻りに喋っていたが、辛うじて<赤ちゃんが生まれた··>という言葉が漏れ聞えた。〔「自慰空想」は子ども同士感染する。ニールのそれをサイモンが目敏くキャッチする手際の良さ！〕

・1977/03/31··ウイリアムとジョシュアが‘怪物’になった気分ですウエンディ・ハウスに侵入し、手当たり次第に物を破壊するといった空想遊びに熱中している。外からそれを眺めていたサイモンが自分もと思ったらしく、同じくウエンディ・ハウスの窓から中へと押し入った。それを愉快地感じて満足げな笑みを浮かべた。実に付和雷同的！それから、悠然として今度はちゃんとした玄関口から立ち去った。

サイモンとアニヤとが彼らが一緒に作った積み木の‘自動車’の中にいる。折々に彼らはそこから這い出してはいなくなり、また戻ってくる。その度に何かしらを運び込み、‘自動車’の中のどこかにそれらをこっそり隠す。彼らは‘泥棒’なんだとか。彼らが盗んだものとは幾つかの敷物やら一個のブリーフ・ケースであったが、それらは他の‘泥棒たち’、つまりダン、ジェームズそれにニールらのもので、彼らの‘倉庫’(スライド・ハウス)に保管してあったものである。やがてこの横取りが発覚して、怒った彼らが一斉に取り戻しにやって来た。‘泥棒’のサイモンとアニヤはなんら抵抗を試みない。たぶん手向かえないと思ったのか、縮こまっている。だが、サイモンは電話をして誰かを呼ぼうとする。おそらくは警察に電話したんだろうと思われたのだが。ところが、その電話が終わったあと、彼は受話器に唾を吐きかけた。そして悪ふざけのゲタゲタ笑いをして、<唾を吐いたら、それが誰かさん person の口に入っちゃったよ>と愉快そうに言う。アニヤはそれを聞いて、同じく面白がり、サイモンと同じことをしてみる。そして2人で高笑いする。それからすぐに彼らは彼らの積み木の‘自動車’の周りをぐるぐる駆け回り始めた。私が何してるの？と訊ねると、サイモンは<泥棒を捕まえるところなの、追っかけてるんだよ>と言うが、実際のところ彼ら2人の外には誰の姿もない。ただ狂宴 orgy の余韻を愉しんでいるかのよう··。

〔サイモンとアニヤとは共犯関係だ。むしろ悪役を大っぴらにやっている。その意図するところは‘母親の

inner-child 内なる子ども'への報復だ。'電話'というのは或る種のパパ&ママの秘め事を象徴する。そこに侵入し、邪魔をし破壊工作を試みようとする点で彼らは結託し共謀しているわけだ。今やジャッキーの妊娠の事実は隠しようもない。プレイグループの子どもたちの中には不穏な空気が漲っていた。弟妹の誕生とは、子どもにしてみれば、謎々でしかない。部外者として排斥されていることに深く傷つく。愛の対象 Love object との(距離 distance)は物理的だけではなく心理的なものだ。この距離を埋める手段の一つは'電話'であるわけだが、それも信頼に値しない。むしろ羨望 envy を刺戟する。この Linking(繋がり)は穢されるなり断ち切られるなり、猛烈な攻撃の的にされる。そして、いずれこのテロ行為の破壊の爪痕が心の問題になってゆくのだが・・・]

【補記】

サイモンが遊びの中で'お兄ちゃん'らしき片鱗を垣間見せることは皆無と言えた。彼は20ヶ月という最長の期間、プレイグループで私と一緒にいたことになる。彼の年齢は4歳1ヶ月から5歳9ヶ月の間になる。この観察期間の後半、彼はグループの中で最年長であったはず。だが、彼の遊び相手になっていたのは一歳半ほど年下の幼いイアンそしてアニヤ、もっと幼い2歳半以上も違うエスタやジョシュアであったりする。自分に近い年齢の他の男の子ら、例えばシルポーとかニール、それにアルタフとの交流の記録が殆ど見当たらない。Big-boys の彼らが遊びで試みたところの幾らか'創造的な傾き'に同調することはサイモンの場合まったくない。これはなかなか意味のあることに思える。同じ場に同時に一緒にいても子ども同士の関係づけが必ずしも成立するとは限らない。'相手にしない・相手にされない'ということもあり、そこには協同性に欠け、相補性をも持ち得ない。非触媒的といおうか。それでどちらかというサイモンは彼らと比べて、立ち遅れているといわざるを得ない。幼稚な印象は免れない。それはおそらく「エディプス葛藤」の'work-through'に絡むところの心的構造の歴とした違いであろう。

取り敢えず彼の場合、'次の赤ん坊'は誕生していなかった。一人っ子としてママを一人占めしてる。それでただ無邪気に'小児万能感 infantile omnipotence'に耽溺していたともいえるが。まるで'天下を盗った不届き者'といった印象だ。ただやはり弟妹の誕生という事実を予期しての疑心暗鬼は彼の中で払拭しきれていない。特にジャッキーの妊娠が明らかになるにつれ、彼の'自慰空想'のアクティヴ・アウトは傍若無人で情け容赦のないものとなってゆく。かくして彼はプレイグループで pre-school の子ども時代を大いに満喫して終わったともいえよう。それで生涯彼がこれでやってゆけるとしたらもう万歳であろう。どうやら女の子の友達にも不自由はしないようだし。一緒に悪いことをする楽しみも知っている。その不逞極まりない無邪気さにはただただ参ったとしか言いようがない。そのあつぱれ'子どもっぽさ'がゆえに、私にとっては実に豊富な観察資料を提供してもらえたことにもなる。さてさて、彼の<大きくなったら、ママと結婚する>というのはどうなったのだろう。親が老いて死んでゆくということに彼はどう付き合ったのだろう。彼の場合、心が躓き砕かれるということはあったのだろうか。心が成熟してゆくには時間がかかる。サイモンはいつお兄ちゃんとして'もう一人の誰か'を同胞として認め、そして受容することができるのだろうか。そんな疑問が残る。(2013/11/11 記)
